高山神社

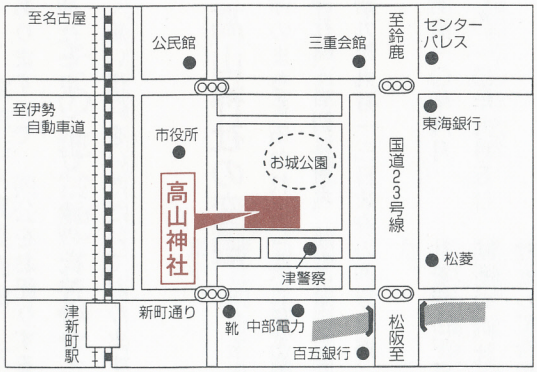
参拝のしおり

食前感謝

たなつもの百の木草もあまてらす
日の大神のめぐみえてこそ（頂きます）

食後感謝

朝よひに物くふごとに豊受の
神のめぐみを思へ世の人（御馳走さま）



※近鉄津新町駅下車　徒歩8分　バス　岩田橋下車　徒歩2分

高　山　神　社

〒514-0033 津市丸之内27－16
TEL 059-225-8558
FAX　　同　上

御祭神　藤堂高虎公像（四天王寺蔵）

御祭神について

御祭神の藤堂高虎公は、弘治二年（一五五六年）滋賀県の藤堂村（現、甲良町）お生まれになりました。

青年時代は、浅井長政、秀長（秀吉の弟）に仕え、出世の糸口をつかむことが出来ました。秀長の死後は秀吉の直臣として、宇和島（四国）の城主となりました。秀吉の死後は家康に起用され、関が原合戦、大阪冬・夏の陣に数々の武功をたて、戦国武将として、不動の地位を確立しました。また一方では築城の名手としても名高く、宇和島、今治をはじめ膳所、丹波、亀山、篠山、伏見、大阪、江戸等多くの城の設計を手がけました。

そして家康側近としては、外様大名であり乍ら、譜代大名たちのなし得なかった、多くの重要な問題や困難な事業等をすべてなしとげるなど、比類なき、敏腕をふるい、のちには伊賀を合わせると三二万三〇〇〇石の領主となり、津市発展の礎をきずきました。

寛永七年（一六三〇年）江戸藩邸に於いて七五才の輝かしい生涯を閉じられました。

安濃津と藤堂高虎公

織田信長の弟、信包（ノブカネ）が藩主の頃の安濃津まちは僅か五万石の小さな城下まちでした。

慶長十三年（一六〇八年）藤堂高虎公が伊予（四国）の今治から津に移封、藩主となりました。高虎公は自ら先頭にたって、「城」を中心としたまちづくりに努めました。

武家屋敷は城の北、西、南側とし、東には町屋を配置しました。そして、まちはづれを通っておりました伊勢街道を城下へ近づける一方、岩田川の水を堀川により、城下へ引き入れ、水、陸による交通の便をはかり、人の交流、物資の運搬を盛んにし、津のまち発展の基盤を整備しました。のち津藩は一躍三二万（津・伊賀を合わせ）の大城下町となりました。

安濃津の開祖、藤堂高虎公のおくり名が「高山居士」でありますので、同公をお祀りするお宮さんの社号を高山神社と申し上げ、津の氏神さまとして市民の方々から広く篤い信仰をいただいております。

高山神社の変遷

津のまちを拓かれました、藤堂高虎公をお祀りする高山神社は、当初は藩主、藤堂家内に祀られておりましたが、明治九年九月一三日政府の許しを得、神社創建

明治一〇年八月　社を津市下部田に建立
〃　一〇年九月五日　同所の両社八幡社境内に高山神社として合祀
〃　一二年七月四日　神社の社格を県社に列せられる
〃　三六年十月四日　津城内（丸之内本丸）に高山神社を遷座、お城の中のお宮さんとして広く親しまれました。
昭和二〇年七月　米軍による津市大空襲により神社は全壊境内は焼土と化しました。
〃　二一年　仮社殿建立
〃　四五年四月五日　津市都市計画復興事業の実施に伴い現在地（津城の内堀埋立地）に御社殿を遷座、現在に至っております。

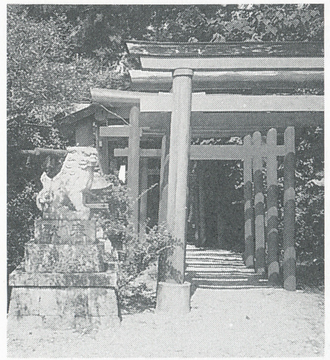
境内社

城山稲荷大神さまについて

高山神社境内に合祀の城山稲荷大神さまは、伊勢市浦口町に「二八稲荷神社」として祀られておりました。

二月、八月はもとより毎月、二日と八日には地元民よりも、津市からの商工業者や市民が列をなすほどに参詣したそうです。この為、明治四四年に二八稲荷神社を、津城内の高山神社境内に遷座移転し「城山稲荷神社」と改称、津市の商工業産業育成の守護神として多くの方々から、あつい信仰を受けておりました。前述の大空襲より全焼昭和四五年現在地に遷座。現在に至っております。

（高山神社参道）



（城山稲荷神社）

その他合祀されている神々

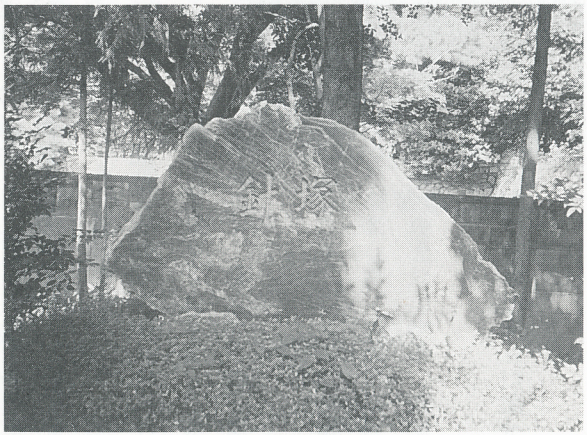
木花佐久夜毘売命　大物主命
建速須佐之男命　大山祇命
大国主神　大雀命
品陀和気命　表筒之男命
中筒之男命
八重事代主神　底筒之男命

御祭礼

新年祭　一月五日
春季大祭　四月五日
秋季例大祭　十月五日（高山公命日）
歳且祭　一月一日
節分祭　二月三日
初午祭　三月初めの午の日
夏越の祓　六月三十日
新嘗祭　十一月二十三日
大晦日大祓　十二月三十一日

針供養祭

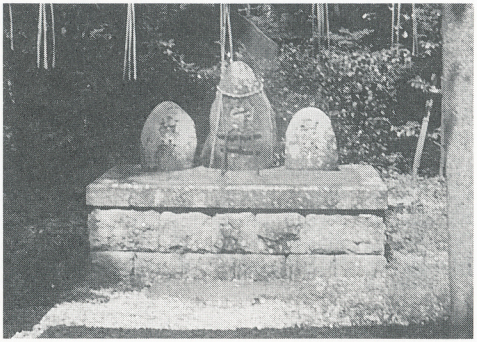
江戸時代に二月八日を針供養の日と定められました。日本和裁士会、三重県支部の針塚が建立されております神社境内には毎年、この日、県内各地から大勢の和裁士さん方が集い、折れたり損傷した針を針塚に納める神事のあと、市民や一般参拝者にゼンザイ、甘酒などをふるまい、針、神、人が一体となった楽しく盛大な針供養の縁日風景をくりひろげております。



針　塚

御祈祷等

結婚式、
安産祈願、
初宮詣、
合格祈願、
車輌修祓、
厄　祓、
延命長寿、
交通安全、
家内安全、
商売繁盛、
営業繁栄等の各祈祷



山　神（大山祇神）

津市指定文化財（工芸）について

文久三年（一八六三年）高虎公を神として祀ることを許可されたことを記念して、伊賀、名張の崇敬者から、両社八幡神社に絵馬として奉納されたもので、作者は当時の彫刻界の名手と謳われた安本光政（熊本県人）の手による厚さ九糎の欅の一枚板に桜の寄せ木による彫刻画で、左側に神功皇后、右が武内宿彌。この絵馬はのちに脚をつけ現在は衝立として神殿内に飾られている。